

# ヨルバ語名詞類の分類と機能

塩田 勝彦

2000年3月24日

## 1 はじめに

### 1.1 まえがき

ヨルバ (Yoruba) 語はニジェール・コンゴ語族, クワ (Kwa) 語派, 東クワ諸語, オグン語群に分類され, イガラ (Igala) 語, ウルクミ (Ulukwumi) 語とともにヨルボイド (Yoruboid) 小語群を構成する。分布の中心はナイジェリア連邦共和国南西部の, いわゆるヨルバランド (Yorubaland) 諸州 (ラゴス (Lagos), オグン (Ogun), オンド (Ondo), オシュン (Osun), オヨ (Oyo), クワラ (Kwara) の各州) で, いくつかの方言はナイジェリアに隣接するベニン共和国, トーゴ共和国でも話されている。ヨルバ民族の人口は, ナイジェリアで 18,850,000 人<sup>1</sup>(全人口の 20.3%), ベニンで 465,000 人を数え, 全世界では 2 千万人に達する。

本稿は, ヨルバ語における名詞の振る舞いを, 形態論上および統語論上から全体的に記述することを目的とする。まずヨルバ語における名詞の定義を行い, 意味論的観点から分類し, それぞれの機能を説明する。次に名詞化の多様な方法を記述し, 最後に名詞句/節の構造と, 修飾要素の記述を行う。

### 1.2 発音と表記

本論にはいる前に, ヨルバ語の発音と表記について述べておく。

#### 1.2.1 母音

口母音は /i, e, ɛ [ɛ], a [a], ɔ [ɔ], o, u/ の 7 つである。音価は Daniel Jones の cardinal vowel にほぼ同じだが, /i/ は若干後ろ (中舌) 寄りに発音される。さらに /in [ĩ], un [ũ], ɛn [ɛ̃], ɔn/an [ɔ̃ ~ [ã]/ の 4 鼻母音がある。ɔn と an は 1 音素であるが, m, b, f, p, gb, w, (h) に続くときには ɔn , それ以外は an と書き分けられている<sup>2</sup>。いずれも標準ヨルバ語では [ɔ̃] と発音される方

<sup>1</sup>Ethnologue; <http://www.sil.org/ethnologue/countries/Nigr.html>

<sup>2</sup>h は例外で, ɔn/an の両方と用いられる。

が普通であるが、特にイバダン (Ibadan) 方言では、[ã] と発音されることが多い。

### 1.2.2 子音

子音は /b, t, d, k, g, p [kp̩], gb [gb̩], f, s, ʃ [ʃ], r, l/n, w, y, h, m/ の 16 種が音素として認められる。l と n は相補分布の関係にあり、口母音の前では l、鼻母音の前では n が現われる<sup>3</sup>。他の特徴としては、二重調音閉鎖音 p, gb の存在、無声両唇閉鎖音の欠如、有声摩擦音の欠如などが挙げられる。なお h は有声音であり、声門接近音 (approximant) と解釈すべきである。

### 1.2.3 声調

声調は高声調 (´), 中声調 (記号なし), 低声調 (˘) の 3 種類を基本とするが、この 3 つの組み合わせによって下降声調 (ˆ), 上昇声調 (ˊ), ダウンステップ中声調 (ˉ) が生じる。ただしトネーム (toneme) と認定できるのは H, M, L だけで、他はすべてアロトーン (allotone) である。下降声調と上昇声調の出現環境は次の通りである。

下降声調: (HL ⇒ HF) mótò 「自動車」 ⇒ mótô

上昇声調: (LH ⇒ LR) òrí 「シアバター (shea-butter)」 ⇒ òrì

ダウンステップ中声調は、浮動低声調 (floating L) に M が続く場合に生じる。floating L とは、何らかの理由で母音が脱落し、その声調 L が無音素のまま残ったものである。

oní àgbọ̀n 「ココナッツ売り」 ⇒ alágbọ̀n

現代の一般的な表記法では、アロトーンはすべて表記しない。ただし floating L に関しては、最近表記することが多くなっている。先の alágbọ̀n を表記する方法は、現在では次の 4 通りある。下線部が floating L。

1. alá<sup>h</sup>gbọ̀n
2. alá<sub>h</sub>gbọ̀n
3. alá<sub>h</sub>gbọ̀n

---

ahọ̀n 「舌」 / fihàn 「見せる」

<sup>3</sup>鼻母音は母音の後ろに n を付加して表記されるが、m/n に後続する場合は n が省略される。

bọ̀n [bɔ̃]  
mọ [mɔ̃]  
pín [pĩ]  
nì [nĩ]

#### 4. alágbòn

1 ~ 3 は floating L を表記しているが, 4 では無視している。実際にヨルバランドで使われているのは 1 と 4 だけで, 2 と 3 は学術論文などで一部に用いられている程度である。従来は 4 が一般的であったが, 最近では 1 を用いることが増えている。ただし簡易的な印刷物や新聞, 手書きなどでは, 依然として声調を全く表記しないことも多い。本稿では 1 の方法で表記する。

#### 1.2.4 母音調和

名詞語幹の母音構造は母音調和によって規定されている。母音は

クラス 1: /i, u, a, o, e/

クラス 2: /i, u, a, o, e/

という 2 つのクラスに分かれ, ひとつの語幹に現われる母音は同じクラスからのものに限られる。

クラス 1	クラス 2
ejò 「蛇」	ejó 「訴訟」
ewé 「葉」	èjè 「血」
ebi 「空腹」	ẹbí 「血縁」
eera 「蟻」	ẹdá 「生き物」
ewu 「危険」	ẹwù 「シャツ」

ただし母音調和は外来語には適用されない。

mótò 「自動車」 ”motor” (英語)

名詞の派生に際して, 母音調和は一部の接頭辞<sup>4</sup>についてのみ有効である。語幹の合成による派生にも母音調和は適用されない。

#### 1.2.5 「連声 (Sandhi)」規則

母音で終わる語/形態素の後ろに母音で始まる語/形態素が続く時, 二つの母音と声調は変化する。同様の現象を持つサンスクリット文法 (ただしサンスクリットに声調はない) の術語に倣い, 本稿ではこの現象を「連声 (Sandhi)」と呼ぶことにする。ただしヨルバ語における連声はサンスクリットの場合と異なり, 意味が関与してくる場合があるため, すべてを音声環境の記述のみで解決することができない点に注意が必要である。ここでは基本的な連声の傾向を述べるにとどめる。

<sup>4</sup> 「行為者名詞」を参照。

母音の変化 母音の変化には縮約と脱落があり、連続する母音 1 と母音 2 が同じである場合は縮約が起こる。

gé 「切る」 ewé 「葉」 ⇒ géwé 「葉を切る」

sò 「話す」 òrò 「言葉」 ⇒ sòrò 「話す」

母音 1 と母音 2 が異なる場合はどちらかが脱落するが、脱落の仕方によって次の 3 つのパターンに分けられる。

1. 母音 1 が残る場合、

bí 「(子)もうける」 ọmọ 「子供」 ⇒ bímọ 「子をもうける」

2. 母音 2 が残る場合、

kí 「挨拶する」 ọmọ 「子供」 ⇒ kómọ 「子供に挨拶する」

3. 母音 3 に変化する場合、

pa 「殺す」 iró 「嘘」 ⇒ puró 「嘘をつく」

頻度的には 1 のケースが比較的多く、3 のケースは語彙として特化した例に多く見られる。また、

ké 「叫ぶ」 + igbe 「叫び」 ⇒ kégbe/kígbe 「叫ぶ」

jẹ 「食べる」 + ìyà 「苦しみ」 ⇒ jèyà/jìyà 「苦しむ」

のように 1 と 2 の両パターンがどちらも可能な例もある。さらに、

gbé 「運ぶ」 + ẹ̀sẹ̀ 「脚」 ⇒ gbésẹ̀ 「行ってしまう、死んでしまう」 / gbésẹ̀ 「脚を動かす」

gbà 「取る、受ける」 + iná 「火」 ⇒ gbaná 「火を取る」 / gbiná 「火がつく」

のように、同じ語の組み合わせが異なる連声のパターンを選択することで、意味の異なった連語を作るケースもある。

声調の変化 声調の変化は、母音の場合に比べて規則的である。ここで注意しなければならないのは、声調の変化は、母音の変化とは全く独立して起こるということである。連続した二つの声調が同じである場合は、単に縮約されるだけである。二つの声調が異なる場合、表層には H > L > M の順位で残る。ただし「声調」の項で述べたように L は決して脱落せず、floating L という形でその痕跡をとどめ、後続する声調に変化を与えるので注意が必要である。例えば、

ilé 「家」 iwé 「本」 ⇒ iléwèé 「学校」

という例で、iwé の語頭の L は、ilé の語末の H に取って代わられているが、後続する é に影響を与え、これを R にしている。

なお、声調の変化は規則的であるとすでに述べたが、形態音韻論的な例外が存在する。動詞が 3 人称単数目的語代名詞をとる場合、次のような変化が起こる。下線部に注目。(3 人称単数目的語代名詞の形については「目的語代名詞」の項を参照。)

ó rí i ⇒ ó r<sub>i</sub> 「彼は見た」

ó gbó ọ ⇒ ó gb<sub>o</sub> 「彼は聞いた」

o se é ⇒ o s<sub>e</sub> 「ありがとう(あなたは行なった)」

ここでは、常に残るはずの H が脱落しているが、動詞の声調と母音の両方が脱落していると考えたと説明できる。

## 2 名詞の認定

### 2.1 名詞認定の難しさ

ヨルバ語における名詞の認定は、音声的、意味的、形態的などさまざまな基準から議論されてきたが、伝統的な名詞の定義と相容れない例が多く、現在では文法的機能のみに頼り、その他の基準は分類から排除することが定説となっている。

例えば、

ó jààde kiákíá 「彼は 急いで 外へ出た」

彼は 外へ出た 急いで

ó rí roboto 「それは 丸い」

それは 見える 丸く

における kiákíá と roboto は、副詞として翻訳されるものであるが、これらは同一認定の形態素 ni を後置し、文頭に持ってくることでフォーカス倒置文を作ることができる。

kiákíá ni ó jààde 「急いで彼は外へ出た」

急いで である 彼は 外へ出た

roboto ni ó rí 「それは丸い」

丸く である それは 見える

ところが、次の例における副詞的要素(下線部)は、フォーカス倒置文を作ることができない。

ó tètè lọ 「彼は遅れずに行った」  
彼は 遅れず に 行った

\*tètè ni ó lọ

ó lọ rí 「かれは前に行った」  
彼は 行った 前に

\*rí ni ó lọ

機能主義的立場からヨルバ語を分析した Awobuluyi は、*kiákíá* や *roboto* が前置詞 *ní* とともに *ní kiákíá* , *ní roboto* という副詞句として用いられるという事実も、これらが名詞であることの根拠としている<sup>5</sup>。

さらに Awobuluyi は、「文の主語になりうるもの」は名詞でなければならぬと規定している関係上、代名詞を名詞のサブカテゴリーに組み入れ、代名詞のカテゴリーを廃止している<sup>6</sup>。

これに対し、より伝統的な立場からヨルバ語を記述した Bamgboṣe は名詞句の構造に着目し、「単独で用いられ、名詞句の中で修飾されたりすることのできる語」という定義を与え<sup>7</sup>、*kiákíá* や *roboto* のような語は副詞として名詞とは別のカテゴリーに分類している。代名詞についても、被修飾語になれないなど、名詞の定義と相容れない性質を根拠に代名詞カテゴリーを別に立てている。

音声的に見ると、本来ヨルバ語の名詞はすべて母音で始まり、第一音節の声調は L か M であるという音声上の特徴を持っていたのだが、外来語が多く導入されるに至り、この特徴は崩れつつある。外来語名詞は、音韻および音節構造さえヨルバ語化していればその他の音声上の制限は全くない。また現代ヨルバ語には名詞語頭の母音を脱落させるという傾向があるため、見かけ上子音始まりの名詞はかなり増えてきている。

このように、意味上および音声上の基準からは名詞を認定するのが困難であるという事実に鑑み、本稿では、基本的に Bamgboṣe の立場に従って名詞を分類した上で、意味上および機能上の分類を試みてみたい。代名詞については、名詞との機能的相違点をはっきりさせた上で、別のカテゴリーとして扱い、名詞および代名詞的名詞<sup>8</sup>とともに名詞類 (nominal) という上位カテゴリーを構成するという立場をとることにする。動詞の主語の位置に立ちうるという特徴において、すべての名詞類は共通している。

## 2.2 名詞の認定条件

名詞は、次の 4 つの条件のどれかを満たしていなければならない。

<sup>5</sup>Awobuluyi 1978. pp.17.

<sup>6</sup>Awobuluyi 1978. pp.22.

<sup>7</sup>Bamgboṣe 1974

<sup>8</sup>「代名詞的名詞」を参照。

1. 名詞的修飾語として用いることができる

名詞は、名詞的修飾語として他の語を修飾することができる。例えば、名詞句

ilé oba (ilé 「家」、oba 「王」) 「王宮」  
òkùnrin olówó (òkùnrin 「男」、olówó 「金持ち」) 「金持ちの男」

における oba と olówó は名詞的修飾語であり、従って名詞であると認定できる。名詞的修飾語が子音で始まる場合、先行母音(すなわち、非修飾語の末母音)の伸長が行われる。伸長母音の声調は M<sup>9</sup>。

(下線部が伸長母音)

iléè bàbá (bàbá 「父」) 「父の家」  
ajáà Délé (ajá 「犬」、Délé 「デレ(人名)」) 「デレの犬」

ヨルバ語にはいくつかの形容詞があり、名詞的修飾語と同じ位置で用いられるが、形容詞の場合は子音で始まっても<sup>10</sup>伸張母音が現われないので、名詞とははっきり区別できる。詳しくは「名詞句の修飾部」を参照。

2. 修飾語として代名詞をとる

修飾語として代名詞をとることのできる語は、すべて名詞である。

(下線部が代名詞)

ilée rè 「彼(女)の家」  
owóo wa 「我々の お金」  
òròò mi 「私の 話」

人称代名詞は名詞と異なり、被修飾語の位置に立つことができない。ただしヨルバ語には統語論上名詞と全く同じ機能を持つ代名詞的名詞というカテゴリーがある。詳しくは「代名詞的名詞」を参照。

3. oní- および -kí- による名詞派生が可能である

接頭辞 oní- および接中辞 -kí- を用いた名詞派生が可能なのは、すべて名詞でなければならない。oní- による派生は所有者を、-kí- による派生は「どんな～も」或は「悪い～」を意味する。詳しくは「名詞化」を参照。

ilé 「家」 → onílé 「家主」、ilékílé 「どんな家も」  
isẹ́ 「仕事」 → onísẹ́ 「働き者」、isẹ́kísẹ́ 「どんな仕事も」  
aya 「妻」 → aláya<sup>11</sup> 「妻帯者」、ayakáya 「どんな妻も」

<sup>9</sup>伸張母音は修飾語が修飾語代名詞(所有代名詞)の場合にも現われる。修飾語代名詞が1人称単数、及び2人称単数の場合のみ、伸長母音の声調はLとなる。

<sup>10</sup>形容詞はすべて子音で始まる。

#### 4. 疑問文において疑問詞と交替できる

疑問文では人間以外に *kí* 「何」が，人間に *ta* 「誰」が，それぞれ疑問名詞として用いられる。肯定文を疑問文に変える場合，これらの疑問名詞に取って替えることができるのは，名詞だけである。

*mo rí ilé* 「私は家を見た」 ⇒ *kí ni mo rí?* 「私は何を見た？」  
*mo rí olùkó* 「私は先生を見た」 ⇒ *ta ni mo rí?* 「私は誰を見た？」

### 3 分類と機能

本稿では主に意味的特徴に基づいて名詞を下位分類する。ここで用いられる特徴は，名詞の統語的振る舞いに関与的である点に注意されたい。次のような分類が可能である。

#### 3.1 具体名詞と抽象名詞

具体名詞は，目で見たり，指し示したりできるが，抽象名詞はそれが不可能である。動詞 *fi ... kàn* 「触る」と共に用いられるか否かで，具体名詞と抽象名詞を分類することができる。例えば

*mo fowó kan aṣo* 「私は服に触れた」  
*\*mo fowó kan ìlera* 「\* 私は健康に触れた」

で，*aṣo* 「布」は *fi ... kàn* と共に用いることが可能であり，具体名詞に分類されるが，*ìlera* 「健康」は用いることができず，抽象名詞に分類される。その他の具体名詞，及び抽象名詞の例は以下の通り。

具体名詞	抽象名詞
<i>ẹja</i> 「魚」	<i>ifẹ</i> 「愛情」
<i>àpótí</i> 「箱」	<i>àláfà</i> 「平和」
<i>ìwé</i> 「本」	<i>ikú</i> 「死」
<i>ọmọ</i> 「子供」	<i>àlọ</i> 「出発」
<i>igi</i> 「木」	<i>àní</i> 「貧困」
<i>òrùlé</i> 「屋根」	<i>ìrònú</i> 「内省」
<i>apáta</i> 「岩」	<i>ìmọ</i> 「知識」
<i>iyàwó</i> 「妻」	<i>èrò</i> 「考え」

#### 3.2 可算名詞と不可算名詞

可算名詞は，数えられうるという特徴ゆえに，数詞と共に用いることができる。一方不可算名詞は数詞と共に用いることはできない。例えば，以下の

## 例文

ó bu eran mérin 「彼は肉を4片切り取った」

\*ó bu iyò mérin 「\*彼は塩を4つ切り取った」

(mérin 「4つ」)

において、eran 「肉」は、スープなどに入れる肉片を意味し、数えることができるため数詞と共に用いることができる<sup>12</sup>。一方 iyò 「塩」は数えることができないので、数詞と共に用いることができない。その他の可算名詞、及び不可算名詞の例は以下の通り。

可算名詞	不可算名詞
ìwé 「本」	omi 「水」
ajá 「犬」	iyánrìn 「砂」
ewé 「葉」	ẹfọ́ 「野菜」
igbá 「瓢箪」	irun 「毛」
ẹja 「魚」	ẹmu 「ヤシ酒」
ìlú 「町」	òtútù 「寒さ」

### 3.3 人間名詞と非人間名詞

人間名詞は疑問文において、疑問詞 ta 「誰」に置き換えられるが、非人間名詞は kí 「何」に置き換えられる。

wón rí olùkó 「彼らは先生を見た」 ⇒ ta ni wón rí? 「彼らは誰を見た?」

wón rí ẹsin 「彼らは馬を見た」 ⇒ kí ni wón rí? 「彼らは何を見た?」

以上の例文における olùkó 「教師」は人間名詞であり、疑問文では人間を表す疑問詞 ta に置き換えられる。一方 ẹsin 「馬」は非人間名詞であり、疑問文では人間以外を表す kí に置き換えられる。

その他の例は次の通り。

人間名詞	非人間名詞
akòwé 「事務員」	ajá 「犬」
ìyàwó 「妻」	owó 「お金」
àbúrò 「弟, 妹」	ilé 「家」
onílé 「家主」	ìgò 「瓶」
şójà 「兵士」	erin 「ゾウ」
ayaba 「王妃」	omi 「水」
ọkùnrin 「男」	àgùtàn 「羊」

<sup>12</sup>eran 「肉」は切り分けられた肉片の状態にある場合のみ可算名詞として扱われ、それ以外は不可算名詞として扱われる。

### 3.4 場所に関する名詞

場所に関する名詞は、疑問文で疑問詞 *ibo* 「どこ」に置き換えられる。また場所を表す助動詞 *ti / gbé* と共に用いることもできる。例えば

ó wà ní Èkó 「彼は ラゴス にいる」  
⇒ níbo l'ó wà? 「彼は どこ にいる?」  
ó rí mi ní òkè 「彼は 頂上 で私に会った」  
⇒ òkè ni ó ti / gbé rí mi 「頂上 で彼は私に会った」

その他の例は次の通り。

Òyó 「オヨ (地名)」, ilé-ìwé 「学校」, orí 「上」, ìdí 「基地」, òrùlé 「屋根」, ìsàlẹ̀ 「下部」, ìta 「外」, ibi 「場所」, ibẹ̀ 「あの場所」

### 3.5 時に関する名詞

時に関する名詞は、疑問文で疑問詞句 *ìgbà wo* 「いつ」に置き換えられる。例えば

ó lọ ní àná 「彼は 昨日 行った」  
⇒ ìgbà wo ni ó lọ? 「彼は いつ 行った?」  
a dide ní àárò 「私たちは 朝 外出した」  
⇒ ìgbà wo ni a dide? 「私たちは いつ 外出した?」

その他の例は次の通り。

odún 「年」, oṣù 「月」, alẹ̀ 「晩」, ìròlẹ̀ 「夕方」, òní 「今日」, ọ̀sẹ̀ 「週」, ìjéta 「おととい」

### 3.6 数に関する名詞

数に関する名詞は、数に関する修飾語を派生することができる。その種類は次の通り。

基数: eni 「1」, èjì 「2」, èta 「3」, ẹ̀rin 「4」, àrún 「5」, ẹ̀fà 「6」, ọ̀kan / ìkan 「一つ」, ogún 「20」, oḡbọ̀n 「40」, ọ̀rún 「100」, etc.

数字: oókan 「1」, eéjì 「2」, eẹ̀ta 「3」, eẹ̀rin 「4」, etc.

序数: èkíní 「最初 (のもの/人)」, èkejì 「二番目 (のもの/人)」, èkẹ̀ta 「三番目 (のもの/人)」, èkẹ̀rin 「四番目 (のもの/人)」, etc.

基数は数を数える時用いる形で、「1」には数える場合に用いる eni と、「一つ(のもの)」を意味する òkan / ìkan の両方が存在する。

「数字」とは、数そのものの名前で、算数などで用いる。

eéjì àtééjì jẹ́ éérin (àtééjì = àtí 「～と」 eéjì, jẹ́ 「～になる」)  
「2 掛ける 2 は 4」

### 3.7 価格に関する名詞

価格に関する名詞は、疑問文で èlò 「いくら」に置き換えられる。例えば

mo pa Náírà méta 「私は 3ナイラ 稼いだ」

⇒ èlò ni mo pa? 「私は いくら 稼いだ?」

ó ku Kóbò mérin 「彼は 4コボ 残した」

⇒ èlò ni ó kù? 「彼は いくら 残した?」

現在一般に使用されている価格名詞は次の通り。

Náírà 「ナイラ」、Kóbò 「コボ」、àpò 「200 ナイラ」

### 3.8 数量に関する名詞

数量に関する名詞は、後続する名詞の数量を測るものである。数量に関する名詞は、単独で現われることができない<sup>13</sup>。

òpò ènìyàn 「たくさん の人」

ṣàṣà obinrin 「わずか の女性」

その他の例は次の通り。

òpò 「たくさん」、òpòlòpò 「たくさん」、ṣàṣà 「わずか」、kikì 「～のみ」、gbogbo 「全部」、egbẹgbẹ̀rún 「数千」、ogunlógò 「無数」、ìdájì 「半分」、ìdátá 「三分の一」、ìdà méjì 「二分の一」、ìdà méta 「三分の一」、ìdà mérin 「四分の一」 etc.

### 3.9 指示名詞

指示名詞は指示に関する修飾語を派生することができる。次のようなものがある。

èyí 「これ」、ìyẹn 「あれ」、ìwọ̀nyí 「これら」、ìwọ̀nyẹn 「あれら」、ìwọ̀nnì 「あれら」

<sup>13</sup>gbogbo 「全部」は単独でも現われることがある。

### 3.10 疑問名詞

疑問名詞は、疑問文で他の名詞に替って用いられる。次のようなものがある。

kí 「何」、ta 「誰」、èwo 「どれ」、èlò 「いくら」、ibo 「どこ」、  
èkélòó 「何番目」

## 4 名詞化

ヨルバ語では、動詞(句)、名詞、及び文から新しい名詞(節)を派生させることができる。次は動詞及び文を名詞化する例。

lọ 「行く」	→	àlọ 「出発」
sùn 「寝る」	→	àtisùn 「寝ること」
rìn 「歩く」	→	rírìn 「歩くこと」
fi ara balẹ 「沈黙する」	→	ìfarabalẹ 「沈着」
mọ tara ẹni nìkan 「自分自身のみを知る」	→	ìmọ-tara-ẹni-nìkan 「自分本位、利己主義」
wón lọ 「彼らが行った」	→	pé wón lọ 「彼らが行ったこと」

次は名詞から新たな名詞を派生させる例。

ajá 「犬」 → alájá 「犬の飼い主」  
oşù 「月」 → oşooşù 「毎月」

名詞化の方法には次の3タイプがある。

#### 1. 接頭辞による名詞化

lọ 「行く」 → alọ 「出発」  
fẹ 「好む」 → ifẹ 「愛情」  
ilé 「家」 → onilé 「家主」

#### 2. 名詞節導入語<sup>14</sup>による名詞化

文を名詞節化する場合、名詞節導入語 pé<sup>15</sup>を用いる。

wón lọ 「彼らが行った」 → pé wón lọ 「彼らが行ったこと」

#### 3. 重複による名詞化

重複には語全体を重複する完全重複と、語の一部のみを重複する部分的重複がある。

<sup>14</sup>Bamgbose 1990: wúnrẹn aṣe isọdorúko

Awobuluyi 1978: introducer

<sup>15</sup>péは本来「(〜と)言う」を意味する動詞。名詞節導入語としての機能は、派生されたものと考えられる。

(a) 完全重複による派生

ọdún 「年」 → ọdọdún 「毎年」  
wolé 「家に入る」 → woléwolé 「衛生検査官」  
ọmọ 「子供」 → ọmọkọmọ 「どんな子供でも、悪い子供」

(b) 部分的重複による派生

lọ 「行く」 → llọ 「行くこと」  
rìn 「歩く」 → rrìn 「歩くこと」  
dùn 「甘い」 → ddùn 「甘さ」

## 4.1 名詞化の分類

名詞化のプロセスによって新たに派生された名詞のタイプに応じて、名詞化を次のように分類する。

### 4.1.1 抽象名詞

抽象名詞は動詞及び動詞句から派生され、その方法は次の3通り。

#### 1. 接頭辞 à- / ì- を動詞及び動詞句に付与する方法

lọ 「行く」 → àlọ 「出発」  
bọ 「来る」 → àbọ 「到着」  
jọ 「集まる」 → àjọ 「集会」  
rò sọ 「想像する」 → àròsọ 「想像」  
  
fẹ 「好む」 → ìfẹ 「愛情」  
rìn 「歩く」 → ìrìn 「旅」  
gbà gbọ 「信じる」 → ìgbàgbọ 「信用」  
yọnu 「厄介である」 → ìyọnu 「トラブル」

どちらの接頭辞を取るかは、語彙的に決定している場合が普通だが、中には両方の接頭辞を取りうる例もある。

mọ ọràn 「忠告する」 → ìmọràn / àmọràn 「忠告」  
yé sí 「尊敬する」 → ìyẹsí / àyẹsí 「尊敬」  
yí padà 「変わる」 → ìyípadà / àyípadà 「変化」  
bẹ wò 「訪れる」 → ìbẹwò / àbẹwò 「訪問」

以上の例における接頭辞 à- / ì- の選択は、自由変異である。ただし、両方の接頭辞を異なった意味に使い分けている例も存在する。

dán wò 「試す」 → àdánwò 「試練」  
→ ìdánwò 「試験」

## 2. 部分的重複による方法

動詞の語頭子音を重複し，母音 í (声調は常に H) を挿入することにより，動作，様態を表す名詞を派生することができる。

(下線部が重複された子音)

lò 「行く」 → lílò 「行くこと」  
rìn 「歩く」 → rínrìn 「歩くこと」  
ra aṣò 「服を買う」 → ríra aṣò 「服を買うこと」  
dùn 「甘い」 → dídùn 「甘さ」

目的語を持つ動詞句を，部分的重複によって名詞化した場合，目的語の語順は動詞の前と後の両方が可能になる。

(下線部が目的語)

ra aṣò 「服を買う」 → ríra aṣò / aṣò ríra 「服を買うこと」  
sò òrò 「話す」 → sísrò / òrò síso 「話すこと」  
kò orin 「歌う」 → kíkò orin / orin kíkò 「歌うこと」  
ja olè 「盗みを働く」 → jíja olè / olè jíjà 「窃盗」

目的語を後置した場合と，前置した場合には意味が若干異なる。後置した場合は，特に言外の含みのない，ただの動作を表し，前置した場合は，習慣化した動作を表す。特に後者は，話者が非難のニュアンスをこめて用いることが多い。

(下線部が目的語)

ríra aṣò 「服を買うこと」  
aṣò ríra 「よく服を買うこと，服ばかり買うこと」  
aṣò ríra kò dá (kò dá 「よくない」) 「服ばかり買うのはけ  
しからん」

## 3. 接頭辞 àti- を動詞及び動詞句に付与する方法

lò 「行く」 → àtilò 「行くこと」  
dé adé 「戴冠する」 → àtidádé 「戴冠すること」  
kò ilé 「家を建てる」 → àtikólé 「家を建てること」  
ra mótò 「車を買う」 → àtira-mótò 「車を買うこと」

àti によって派生された名詞は様態，或は動作を表す。

<u>àtilọ</u> kò sòro	(= bí a ẹ̀e máa lọ kò sòro)
(kò sòro 「難しくない」)	「行くこと(行き方)は難しくない」
ó n̄ rojú <u>àtilọ</u>	(= ó n̄ rojú lílọ)
(ó n̄ rojú 「彼は賛成している」)	「彼は行くことに賛成している」

#### 4.1.2 行為者名詞

行為者名詞は ẹ̀ni tí ó ẹ̀ n̄kan 「~をする人」という名詞節に置き換えることができる。

ẹ̀ni tí ó n̄ mutí 「酒を呑む人」	=	òmutí 「酒呑み」
ẹ̀ni tí ó n̄ wòran 「観劇する人」	=	olùwòran 「観客」

行為者名詞の派生方法には、次のようなものがある。

##### 1. 動詞及び動詞句に、接頭辞 ò- / ò- を付与する方法

şeré 「演奏する」	→	òşeré 「楽団」
puró 「嘘をつく」	→	òpuró 「嘘つき」
şişé 「働く」	→	òşişé 「働き者」
mùwè 「泳ぐ」	→	òmùwè 「泳ぐ人」
mọ̀ iwé 「本を知る」	→	òmọ̀wé 「博士」
jẹ̀ ogbón 「意味を理解する」	→	òjẹ̀gbón 「教授」
dá ojú 「冷淡である」	→	òdájú 「冷淡な人」

ò- / ò- の選択は、後続する母音に合わせ、母音調和のルール<sup>16</sup>に従って決定される。

##### 2. 動詞及び動詞句に、接頭辞 òn̄- を付与する方法

専門的職業を表す名詞によく用いられる。

tẹ̀wé 「印刷する」	→	òntẹ̀wé 「出版人, 出版社」
kọ̀wé 「書く」	→	ònkọ̀wé 「作家, 文筆家」
tajà 「商売をする」	→	òntajà 「商人」
rorò 「乱暴である」	→	ònròrò 「乱暴者」

##### 3. 動詞及び動詞句に、接頭辞 a- を付与する方法

dájó 「判決を下す」	→	adájó 「判事」
kọ̀wé 「書く」	→	akọ̀wé 「事務員」
kọ̀rin 「歌う」	→	akọ̀rin 「歌い手」
kẹ̀kọ̀dọ̀ 「教育を受ける」	→	akẹ̀kọ̀dọ̀ 「学生」

<sup>16</sup> 「母音調和」を参照。

#### 4. 名詞に、接頭辞 oni- を付与する方法

この方法による名詞は、すべて ù で始まる名詞を基にしているが、オヨ (Ọyó) 方言を基本とした現代の標準ヨルバ語には ù で始まる名詞がないため、古語、もしくはオヨ方言以外の方言に由来<sup>17</sup>し、広まった可能性がある。

oni ?ùbèwò	→	olùbèwò	「調査員」
oni ?ùgbèjà	→	olùgbèjà	「味方」
oni ?ùgbàlà	→	olùgbàlà	「救世主(キリスト)」
oni ?ùpèsè	→	olùpèsè	「扶養者(キリスト)」
oni ?ùbùkún	→	olùbùkún	「加護者(キリスト)」

#### 5. 動詞句の重複による方法

特定の動詞と名詞が結び付いた連語<sup>18</sup>を重複して、行為者名詞を派生する。

daran 「(家畜を) 追う」	→	darandaran 「家畜を追う人」
túlé 「裏切る」	→	túlétúlé 「裏切者」
dánà 「(道路で) 強盗をする」	→	dánàdánà 「武装強盗」
gbómọ 「子供をさらう」	→	gbómọgbómọ 「子供さらい」
paná 「火を消す」	→	panápaná 「消防隊」

#### 4.1.3 道具名詞

道具名詞は ohun tí ó ní ẹ̀ ǹkan / ohun tí a fi ní ẹ̀ ǹkan 「それで何かを行う物」という名詞節に置き換えることができる。

ohun tí a fi ní gbálẹ̀ 「床を掃く物」	=	ìgbálẹ̀ 「帚」
ohun tí a máa ní d̀ 「縛る物」	=	ìd̀ 「包み」
ohun tí ó ní tẹ̀ ǹkan 「印刷する物」	→	òntẹ̀ 「スタンプ」

道具名詞の派生には、次の4通りの方法がある。

#### 1. 動詞及び動詞句に、接頭辞 ì- / à- を付与する方法

<sup>17</sup>例えばイジェシャ (Ìjẹ̀ṣà) 方言には、u で始まる名詞 (uṣu 「ヤム」など。標準語では iṣu) が残存している。

<sup>18</sup>Bamgboṣe 1964, "verb-nominal collocation"

ʃáná 「火花を散らす」 → ɪʃáná 「マッチ,ライター」  
 ránʂo 「縫う」 → ɪránʂo 「ミシン」  
 para 「体を擦る」 → ɪpara 「ボディクリーム」  
 rorí 「頭を横たえる」 → ɪrorí 「枕」  
 wòn 「計る」 → ɪwòn 「秤」  
 lé 「上に載る」 → ɪlé 「一山<sup>19</sup>」

pa tà 「屠って売る」 → àpatà 「屠殺<sup>20</sup>」  
 fò piná 「ヒラヒラ飛ぶ」 → àfòpiná 「蛾,羽蟻」  
 lò kù 「使い古す」 → àlòkù / àlùkù 「中古品」  
 jẹ kù 「食べ残す」 → àjẹkù 「食べ残し」  
 dì rẹ 「縛って浸す」 → àdìrẹ 「絞り染め布」

接頭辞の選択は語彙的に決まっているが, ɪ- をとる例の方が多い。ただし一つの派生に両方の接頭辞が可能な例もある。

ro 「(液体を)注ぐ」 → ɪro / àro 「漏斗」

上の例で, ɪro / àro は自由変異。

## 2. 動詞及び動詞句に, 接頭辞 a- を付与する方法

sé 「漉す」 → asé 「濾過器」  
 jò 「篩う」 → ajò 「ふるい」  
 lù pùpù 「プププと音を立てる」 → alùpùpù 「オートバイ」

## 3. 動詞及び動詞句に, 接頭辞 òn- を付与する方法

tẹ 「押し付ける」 → òntẹ 「スタンプ」  
 kà 「読む」 → ònkà 「読み物」

## 4. 動詞及び動詞句を重複する方法。病名に多い。

jẹdí 「尻を患う」 → jẹdíjẹdí 「痔」  
 jeyín 「歯を患う」 → jeyínjeyín 「虫歯」

### 4.1.4 否定名詞

ヨルバ語は, 動詞及び動詞句から否定名詞を派生することができる。否定名詞の派生には, 次の3通りがある。

#### 1. 動詞及び動詞句に, 接頭辞 à- を付与する方法

この方法で派生される否定名詞は「~しないこと」を意味する抽象名詞である。

lọ 「行く」 → àìlọ 「行かないこと」  
 lówó 「金を持つ」 → àìlówó 「金を持たないこと」  
 tètè dé 「すぐに来る」 → àìtètè-dé 「すぐに来ないこと」

2. 2つの動詞及び動詞句に、2種の接頭辞を組み合わせる方法

接頭辞は第1動詞 (Vb1) が à- , 第2動詞 (Vb2) が àì- を取り、次のような形となる。

à-Vb1-àì-Vb2

Vb1の母音と、後続する接頭辞 àì- は、次のようなプロセスを経て融合する。

jẹ; jẹ tán > àjẹàìjẹtán > àjẹjẹtán (母音脱落) > àjẹjẹtán (逆行同化) 「食べ終わらないこと、食べ残すこと、食べ残す人」

意味的には、抽象名詞と行為者名詞の両方があり、文脈によって決定される。

àjẹjẹtán ni 「彼は食べ残す人だ」(「食べ残す人」行為者名詞)  
 ó jẹ ní àjẹjẹtán 「彼は食べ残した」(「食べ残すこと」抽象名詞)

その他の例:

bù; bù tán	(> àbùbùtán)	> àbùbùtán
「汲む; 汲み尽くす」		「汲み残すこと/人」
pa; pa tán	(> àpaìpatán)	> àpaìpatán
「殺す; 止めを刺す」		「半殺しにすること/人」
wí; gbó	> àwígbó	
「話す; 聞く」		「聞き分けのないこと/人」
kó; gbón	(> àkóìgbón)	> àkóìgbón
「学ぶ; 賢い」		「学んでも身に付かないこと/人」

この方法による否定名詞の派生で、実際に否定されているのは第2動詞のみであることに注意。例えば àwígbó (第1動詞: wí 「話す」; 第2動詞 gbó 「聞く」) は、文字どおりには「聞かずに話すこと/人」を意味する。

3. 2つの動詞及び動詞句に、接頭辞と否定辞を組み合わせる方法

第1動詞が接頭辞 a- を取り、第2動詞は否定辞 máà によって否定される。

a-Vb1-máà-Vb2

否定されるのは第2動詞のみ。意味は à- と àì- を組み合わせた方法による派生と同じ。

lọ; máà dágbére 「行く; 別れを告げない」	→	alómáàdágbére 「別れを告げずに行くこと/人」
rẹru; máà sọ 「荷を運ぶ; 下ろさない」	→	arẹrumáàsọ 「荷を下ろさないこと, 苦勞を好む人」
kólé; máà gbé 「家を建てる; 住まない」	→	akólémáàgbé 「家を建てて住まないこと/人」

#### 4.1.5 所有者名詞

所有者名詞は名詞から派生され, 名詞節 ẹni tí ó ní nìkan 「~を所有する人」と置き換えることができる。ただし, この方法で派生された名詞には, 特殊化した意味でイディオムとして用いられるものが多い。

oní aṣọ	→	aláṣọ 「布の持ち主, 布屋」
oní ogun	→	ológun 「争議を持つ人, 兵士」
oní ọdún	→	ọlọdún 「祝事を持つ人, 祭りの主催者」

所有者名詞の派生には, 次の4通りの方法がある。

##### 1. 名詞(句)に, 接頭辞 oní- を付与する方法

oní ọkọ 「夫」	→	ọlọkọ 「既婚女性」
oní gèlè 「頭に巻く布」	→	onígèlè 「巻布の持ち主, 巻布屋」
oní ẹran 「肉」	→	ẹlẹran 「肉の持ち主, 肉屋」
oní orin 「歌」	→	olórin 「歌を持つ者, 歌手」
oní àpatà 「屠殺」	→	alápatà 「肉屋, 屠殺業者」

##### 2. 重複による方法

oní- によって派生された所有者名詞の前に, 基になる名詞を置くことで, 「誰かの~」という, 被所有者/物を意味する名詞を派生する。

Nn1-oní-Nn1

ọkọ 「夫」	→	ọkọlọkọ 「誰かの夫」
ọmọ 「子供」	→	ọmọlọmọ 「誰かの子供」
ilé 「家」	→	ilé onilé 「誰かの家」
ọrọ 「話」	→	ọrọlọrọ 「誰かの話」
owó 「お金」	→	owólówó 「誰かのお金」

##### 3. 名詞(句)に, 接頭辞 oni- を付与する方法

接頭辞 oni- は, 声調パターン LL(L) の名詞にのみ付与される。また, この方法による派生プロセスの対象となる名詞は主に抽象名詞であり, 派生された名詞はある種の特質, 性質を持った人を表すことが多い。

ègàṅ 「軽蔑」	→	ẹlẹgàṅ 「軽蔑的な人」
òtẹ 「反逆」	→	ọlọtẹ 「反逆者」
ààyẹ 「生きていること」	→	alààyẹ 「生き物」
ẹṣù 「悪魔」	→	elẹṣù 「悪魔的な人」
òṣì 「貧困」	→	olòṣì 「貧民」

#### 4. 名詞(句)に、接頭辞 abi- を付与する方法

人や物の特徴、特に身体的特徴を描写する例が多い。また、悪口に用いられる傾向もある。

oyún 「妊娠」	→	aboyún 「妊婦」
ìyẹ 「羽」	→	abiyẹ 「鳥」
òṣì 「貧困」	→	abòṣì 「貧民」
ẹnu gbàngbà 「大きな口」	→	abẹnu gbàngbà 「大口野郎」
ojú koṅko 「悪い目付き」	→	abojú koṅko 「目付きの悪い奴」
ẹṣẹ wọrọkọ-wọrọkọ 「脚が不自由なこと」	→	abẹṣẹ wọrọkọ-wọrọkọ 「びっこ野郎」

#### 4.1.6 配分名詞

配分名詞とは、「それぞれの～、毎～」或は「どの～も」を意味する名詞である。この名詞化の対象となるのは、名詞のみである。名詞化の方法には、次の2通りがある。

##### 1. 名詞を重複する方法

ẹgbẹ 「社会」	→	ẹgbẹẹgbẹ 「それぞれの社会」
ọdún 「年」	→	ọdọdún 「毎年」
àárọ 「朝」	→	àràárọ 「毎朝」
ọ̀sẹ 「週」	→	ọ̀sẹ̀ọ̀sẹ 「毎週」

##### 2. 接中辞 -kí- を用いた名詞の重複による方法

ẹgbẹ 「社会」	→	ẹgbẹkégbẹ 「どんな社会も」
ẹni 「人」	→	ẹnikéni 「どんな人も」
ilé 「家」	→	ilékílé 「どんな家も」
ìbí 「場所」	→	ìbíkífí 「どんな場所も」

接中辞 -kí- を用いた配分名詞は、ネガティブな意味を持つ場合があり、文脈によって判断する必要がある。

ẹgbẹkégbẹ 「どんな社会も」	/ 「悪い社会、邪悪な結社」
ọmọkómọ 「どんな子も」	/ 「悪童」

#### 4.1.7 副詞的名詞

場所及び時を表す名詞に、接頭辞 àti- を付与し、「～から」という副詞的な意味の名詞を派生する。意味は副詞的であるが、あくまで名詞である点に注意。

òkè 「頂上」	→	àtòkè 「頂上から」
èyìn 「後ろ」	→	àtèyìn 「後ろから」
Èkó 「ラゴス」	→	àtÈkòó 「ラゴスから」
àná 「昨日」	→	àtàná 「昨日から」
àárò 「朝」	→	àtàárò 「朝から」
ìjéta 「おととい」	→	àtìjéta 「おとといから」

#### 4.1.8 強調名詞

名詞のみを対象とした名詞化で、本来の意味を強調する働きがある。名詞化の方法は、次の2通り。

##### 1. 接中辞 -ní- を用いた名詞の重複による方法

この方法による派生名詞は、その性格、特徴を極めたもの、あるいはとりわけその特徴の著しいもの、という意味を持つ。

òpò 「たくさん」	→	òpòlopò 「非常にたくさん」
àgbà 「成人」	→	àgbàlagbà 「中年、初老の人」
ògbó 「チャンピオン」	→	ògbólógbòó 「チャンピオンの中のチャンピオン」

##### 2. 名詞に、接頭辞 oní- を付与する方法

この方法による派生名詞は、「まさしく～」、「典型的な～」のように、まぎれもなくその種類のものであるということを強調する。

akòwé 「事務員」	→	alákòwé 「(典型的な) 事務員」
omoge 「少女、娘」	→	olómoge 「(典型的な) 少女」
akàn 「蟹」	→	alákàn 「(典型的な) 蟹」
agemọ 「カメレオン」	→	alágemọ 「(典型的な) カメレオン」

人名にもよく用いられる。

Àjàlá 「アジャラ」	→	Alájàlá 「アラジャラ」
Àbèní 「アベニ」	→	Alábèní 「アラベニ」
Èdùmarè 「エドゥマレ」	→	Elédùmarè 「エレドゥマレ」

語形的には、やはり接頭辞 oní- を用いた所有者名詞と全く同じであり、紛らわしいが、所有者名詞の場合、派生された名詞と基になる名詞は別のものを指し示すのに対し、強調名詞では派生された名詞と基になる名詞が同一のものである点が異なる。

ọkọ 「夫」 ≠ ọlọkọ 「人妻」 (所有者名詞)  
 ọmọge 「少女」 = ọlọmọge 「(典型的な)少女」 (強調名詞)

## 4.2 名詞化における特徴と問題点

ヨルバ語では、一つの語/句から複数の派生を行うことが可能である。

ṣe 「する」	→	ìṣe 「行動」	抽象名詞
		ṣíṣe 「すること」	抽象名詞
		àtíṣe 「すること」	抽象名詞
		olùṣe 「行為者」	行為者名詞
		àìṣe 「しないこと」	否定名詞
ta ọjà 「商売する」	→	itàjà 「商売」	抽象名詞
		títàjà / ọjà títà 「商売すること」	抽象名詞
		àtítàjà 「商売すること」	抽象名詞
		òntàjà 「商人」	行為者名詞
		tàjàtàjà 「商人」	行為者名詞
		àtàjà 「商売しないこと」	否定名詞
ọdún 「年」	→	ọlọdún 「～才である人」	所有者名詞
		ọḍọḍún 「毎年」	配分名詞
		ọdúnkọdún 「どんな年も」	配分名詞

### 4.2.1 名詞化と同音異義語

同音の接頭辞が複数の派生に用いられているため、同音異義語が多くなる。

ṣáná 「火花を散らす」	→	ìṣáná 「一触即発」	抽象名詞
		ìṣáná 「マッチ」	道具名詞
bẹ 「乞う」	→	àtibẹ 「乞うこと」	抽象名詞
ibẹ 「あそこ」	→	àtibẹ 「あそこから」	副詞的名詞
akàn 「蟹」	→	alákàn 「蟹売り」	所有者名詞
		alákàn 「蟹」	強調名詞

#### 4.2.2 二次派生

派生された名詞から，さらに二次派生を行うことが可能であり，実際によく行われている。

	一次派生	二次派生
pa tà 「屠殺する」	→ àpatà 「屠殺」	→ alápatà 「屠殺業者」
kòwé 「書く」	→ akòwé 「事務員」	→ alákòwé 「事務員」
gbòrán 「聞く」	→ àìgbòrán 「不服従」	→ aláìgbòrán 「反抗的な人」
dájó 「判決を下す」	→ ìdájó 「判決」	→ onídàájó 「判事」

## 5 代名詞

代名詞は名詞類に属するが，修飾語をとることができない。また接続詞 àti による並列も不可能である。代名詞は人称（一，二，三人称）と数（単数と複数）のシステムを持ち，統語的位置（主語，目的語，修飾語）によって三つの異なった系列を有する。

### 5.1 主語代名詞

主語代名詞の基本形は次の通りである。

	単数	複数
1.	mo	a
2.	o	ẹ
3.	ó	wón

主語代名詞は後続する動詞構造辞に応じて若干の異形を持つ。未来を表す動詞構造辞 á の前では次のような形をとる。

	単数	複数
1.	mà	à
2.	wà	ẹ
3.	á	wón

次は否定辞 kò の前で用いられる形。下線部が異形。

	単数	複数
1.	<u>ī</u>	a
2.	o	ẹ
3.	<u>Ø</u>	<u>wọ̀n</u>

## 5.2 目的語代名詞

	単数	複数
1.	mi	wa
2.	ọ/ẹ	yín
3.	動詞の語末母音	wọ̀n

目的語代名詞の声調は、直前に立つ動詞の声調に応じて決定される。直前に立つ動詞が H 動詞の場合、目的語代名詞の声調は M。M/L 動詞の場合は H になる。ただし 2 人称複数代名詞 yín は例外で常に H。

ó rí mí (H 動詞 rí 「見る、会う」) 「彼は私に会った」

ó jo mí (M 動詞 jo 「似る」) 「彼は私に似ている」

ó wò mí (L 動詞 wò 「見る」) 「彼は私を見た」

ó gbà á (L 動詞 gbà 「手に入れる」) 「彼はそれを手に入れた」

ó mu ún (M 動詞 mu 「飲む」) 「彼はそれを飲んだ」

## 5.3 修飾語代名詞

修飾語代名詞は他の名詞を修飾し、名詞句をつくる。所有代名詞 (possessive pronoun) と呼ばれる。

	単数	複数
1.	mi	wa
2.	rẹ/ẹ	yín
3.	rẹ̀/ẹ̀	wọ̀n

## 6 代名詞的名詞

代名詞的名詞は、人称と数のシステムを持つという点で、極めて代名詞的な名詞である。

	単数	複数
1.	èmi	àwa
2.	ìwọ	ẹ̀yin
3.	òun	àwọ̀n

代名詞的名詞は、一般に強調代名詞 (emphatic pronoun)、独立代名詞 (independent pronoun) などと呼ばれ、代名詞として分類されて来たが、その文法的振る舞いは名詞と共通しており、代名詞とは異なる。例えば代名詞的名詞は修飾語をとることができる。

èmi náà 「私も」 (náà 「～も」 冠詞的修飾語)

ìwọ̀ yíí 「この君」 (yíí 「この」 指示詞的修飾語)

また、動詞の主語になる場合、名詞と同じく語末の声調変化<sup>21</sup>を被る。

èmí lọ 「私は行った」

ìwọ̀ mọ 「あなたは知っている」

さらに、接続詞 àti による等位接続が可能である。

èmi àti òun 「私と彼」

## 7 名詞句

### 7.1 名詞句の特徴

名詞句は、次のような3種の構造的位置を占めうる。

#### 1. 名詞句は主語の位置に立ちうる

ajá gbó 「犬は老いた」

bàbá mi lọ 「私の父は行った」

#### 2. 名詞句は目的語の位置に立ちうる

mo ra eja 「私は魚を買った」

ó rí ìyàwó òrẹ̀ mi 「彼は私の友人の妻に会った」

#### 3. 名詞句は、代名詞によって置き換えが可能である

ajá gbó                    ⇒    ó gbó  
「犬は老いた」            「それは老いた」

bàbá mi lọ                ⇒    ó lọ  
「私の父は行った」      「彼は行った」

mo ra eja                 ⇒    mo rà á  
「私は魚を買った」      「私はそれを買った」

名詞句は、主要部と修飾部という2大要素によって構成される。

<sup>21</sup>動詞構造の直前に立つ主語名詞の語末声調が H に変化する現象。本稿では、この H を表記していない。

## 7.2 名詞句の主要部

名詞句には、単一の名詞、代名詞、修飾語を伴った名詞、の3種が存在する。単一の名詞、あるいは代名詞の場合、それはそのまま主要部となる。

	主要部
<u>igi</u> wó 「木が倒れた」	(igi 「木」)
<u>mo</u> ra <u>ɛja</u> 「私は魚を買った」	(mo 「私」、ɛja 「魚」)
ó wo <u>òkè</u> 「彼は頂上を見た」	(ó 「彼」、òkè 「頂上」)

複数の語からなる名詞句は、主要部と修飾部に分けられる。修飾の機能を果たしていない語が主要部である。

	主要部
mo gba <u>ìwé òlá kan</u> 「私はある大きな本を手に入れた」	(ìwé 「本」)
<u>ilé òlá méjì</u> wà níbè 「あそこに大きな家が2軒ある」	(ilé 「家」)

名詞句が修飾部を含む場合、代名詞は主要部になることができない。

## 7.3 名詞句の修飾部

修飾部を構成する修飾語は、次のように分類される。

### 1. 名詞的修飾語

名詞、或は代名詞が他の名詞を修飾する場合、これを名詞的修飾語と呼ぶ。名詞的修飾語が子音で始まる場合、先行する名詞の語末母音が伸長され、中声調を持つ。

<u>ilée</u> bàbá 「父の家」
èwù <u>u</u> Délé 「デレの服」
òmọ <u>o</u> wa 「私たちの子供」
ara <u>a</u> rẹ 「彼の身体」

名詞的修飾語を持つ名詞句は、関係構造と同格構造の二つに分類される。

#### (a) 関係構造

関係構造は、非強調形と強調形の二つに下位分類される。

##### i. 非強調形

非強調形の主要な役割としては、まず所有者の表示が挙げられる。

owóo Délé 「デレのお金」
ilé o <u>ba</u> 「王の家」
ìyàwóo tí <u>sà</u> 「教師の妻」
ìru ẹ <u>ran</u> 「動物の尻尾」

その他にも、様々な関係を表示する役割を持つ。

owóo mótò 「乗車券」(手段)  
 ìgò epo 「油の瓶」(用途)  
 ilé eḡó 「裁判所」(場所)  
 ajá oḡe 「獵犬」(用途)  
 omọ Èkó 「ラゴス生まれの人」(場所)  
 àpótí idẹ 「蓋付きの箱」(形体)

次のようなイディオムの連語が存在する。

owó orí (owó 「お金」, orí 「頭」) 「税金」  
 enu ònà (enu 「口」, ònà 「道」) 「戸口」  
 ilé iwé (ilé 「家」, iwé 「本」) 「学校」  
 ojú òrun (ojú 「目, 顔」, òrun 「天」) 「空」

ii. 強調形

強調形は、二つの要素間に接続辞 ti を挟むことによって作られる。先行する名詞の語末母音は伸長され、中声調を持つ。非強調形に比べ、所有関係がはっきり示されている。

非強調形	強調形
ilé oḡa 「王の家」	ilée ti oḡa 「王のものである家」
ilée wa 「私たちの家」	ilée tiwa 「私たちのものである家」

また、専ら所有の意味でのみ用いられる点でも、非強調形とは異なっている。

aṣọọ ti ègbón 「兄の服」  
 ilẹ̀ẹ̀ ti ìlú 「国有地」  
 ajáa ti Délé 「デレの犬」

(b) 同格構造

i. 主要部と修飾部が同一であるもの

dókítà òyìnbó 「白人の医者」(dókítà 「医者」 = òyìnbó 「白人」)  
 oḡùnrin oḡórò 「金持ちの男」(oḡùnrin 「男」 = oḡórò 「金持ち」)

次の例は関係構造

aya oḡa 「王妃」(aya 「妻」 ≠ oḡa 「王」)

ii. 修飾部が主要部の内容を説明しているもの

òyìnbóo dókítà 「医者である白人」

iii. 両要素がメタテシス可能なもの

ọ̀kùnrin alágbára = alágbára ọ̀kùnrin 「強い男」  
 ọ̀mọ aláìgbọ̀ràn = aláìgbọ̀ràn ọ̀mọ 「聞き分けのない子」  
 obìnrin aṣẹ̀wó = aṣẹ̀wó obìnrin 「売春婦」  
 ìyàwó pamí-ń-kú = pamí-ń-kú ìyàwó 「ひどい妻」  
 ọ̀kọ oníranù = oníranù ọ̀kọ 「役立たずの夫」

次の例は関係構造

aya ọ̀ba 「王妃」 ≠ \*ọ̀ba aya 「\* 妻の王」

iv. 代名詞的名詞がどちらかの要素を占めるもの

àwa Yorùbá 「我々ヨルバ」 (àwa 「我々」, Yorùbá 「ヨルバ」)

2. 形容詞的修飾語

形容詞はすべて子音で始まる。例外は音節主音的鼻音で始まる *ńlá* 「大きい」のみ。子音で始まる名詞的修飾語とは異なり、先行する名詞の語末母音は伸長されない。

形容詞には、基本形容詞、派生形容詞、及び重複形容詞の3種がある。

(a) 基本形容詞

基本形容詞はすべて複音節からなり、修飾用法においてはそのまま形容詞として用いられるが、叙述用法では動詞として用いられる。

*dúdú* 「黒い」

*ajá dúdú* 「黒い犬」(修飾) *ajá náà dúdú* 「その犬は黒い」(叙述)

*funfun* 「白い」

*aṣọ funfun* 「白い布」 *aṣọ yìí funfun* 「この布は白い」

(b) 派生形容詞

派生形容詞は、動詞の部分的重複によって作られる。

動詞

派生形容詞

*le* 「強い, 堅い」 → *lílẹ* 「強い, 堅い」

*pọ̀* 「たくさんある」 → *púpọ̀* 「たくさん」

(c) 重複形容詞

すべての形容詞は、重複により、強調の意味を持つ派生形容詞を作ることができる。

*okíta ńlá* 「大きな 石」 → *okíta ńlá ńlá* 「とても大きな 石」

*àṣà burúkú* 「悪い 習慣」 → *àṣà burúkú burúkú* 「非常に悪い 習慣」

*adiyẹ funfun* 「白い 鶏」 → *adiyẹ funfun funfun* 「真っ白な 鶏」

*ohùn lílẹ* 「力強い 声」 → *ohùn lílẹ lílẹ* 「とても力強い 声」

形容詞の重複は、先行する名詞の数とは関係なく用いられる。

*adiyẹ funfun funfun* 「真っ白な 鶏」(単数)

*àwọn adiyẹ funfun funfun* 「真っ白な 鶏たち」(複数)

3. 数詞的修飾語

修飾語として用いられる数詞には、次の4種がある。

(a) 総数

ajá méjì 「2頭の犬」  
ìwé méta 「3冊の本」  
ọmọ mélòó 「何人の子供」

(b) 全体数

ajá méjèjì 「両方の犬」  
ìwé métètèta 「3冊全部の本」  
ọmọ mélòó 「何人かの子供 全員」

疑問数詞の全体数形は、総数形と同じ。

(c) 配分

ajá méjì méjì 「犬2頭ずつ」  
ìwé méta méta 「本3冊ずつ」  
ọmọ mélòó mélòó 「子供何人ずつ」

(d) 序数

ajá kejì 「2頭目の犬」  
ìwé kẹta 「3冊目の本」  
ọmọ kelòó 「何人目の子供」

4. 指示詞的修飾語

指示詞的修飾語には、次のようなものがある。

yì 「この」、wònyí 「これらの」、yẹn 「あの」、wònyẹn 「あれらの」、nì<sup>22</sup> 「あの」、wọnnì 「あれらの」、wo 「どの」

指示詞的修飾語は、一つの名詞句に一つしか用いることはできない。

5. 冠詞的修飾語

冠詞的修飾語には、次のようなものがある。

nàà 「あの、例の」、gan-an 「まさしくその、ちょうどその」、  
pàápàá 「～も」、nìkan 「～だけ」、gbogbo 「全部」、kẹ 「～すら」

冠詞的修飾語は、一つの名詞句に複数を用いることも可能である。

6. 修飾節

修飾節は、修飾節導入辞 tí によって導入される。

ilé tí mo kọ 「私の建てた家」  
àwọn tó<sup>23</sup> lọ 「行った人々」  
ìşẹ tí bàbáa wa şẹ 「私たちの父がした仕事」

<sup>22</sup>nì, wọnnì は、yẹn, wònyẹn に比べ心理的により遠い事象を指すが、その使用は現代の口語では廃れつつある。

<sup>23</sup>tó < tí ó

修飾節 (関係節) の主語が 3 人称単数代名詞 (ó) の場合, 主要部名詞 (先行詞) との関係は, (a) 一致する場合, (b) 一致しない場合, (c) 一致するともしないともとれる場合, の 3 タイプが可能である。

(a) ẹni tó dé (ẹni 「人」, dé 「到着する」) 「到着した人」 (修飾節の主語 ó と主要部 ẹni が一致する)

(b) iṣẹ́ tó ẹ (iṣẹ́ 「仕事」, ẹ 「する」) 「彼がした仕事」 (修飾節の主語 ó と主要部 iṣẹ́ が一致しない)

(c) ẹni tó mò (mò 「知る」) 「知る人」 (主語 ó と主要部 ẹni が一致する) / 「彼の知る人」 (一致しない)

修飾節の主語が名詞の場合, 主要部名詞と一致することはない。主語が 3 人称単数以外の代名詞の場合も, ふう主要部名詞とは一致しないが, 主要部名詞が代名詞的名詞の場合のみ一致することがある。

ẹyin tí ẹ wá (wá 「来る」) 「やって来たあなたたち」

àwọn tí wón bèrè (bèrè 「質問する」) 「質問した彼ら」

## 7.4 名詞句における問題点

### 7.4.1 修飾部における語順

修飾部が複数の修飾語からなる場合, 標準的な語順は次の通りである。

主要部	修飾部					
	名詞	形容詞	数詞	関係節	指示詞	冠詞 <sup>24</sup>
ilé 家		ńlá 大きな		tí mo kọ 私が建てた	yí	
	「私が建てた大きな家」					
aṣọ 布	wa 我々の	dúdú 黒い			yí この	náà 例の
	「私たちの例の黒いこの布そのもの」					
iṣẹ́ 仕事	olùkọ 教師				yí この	náà 例の
	「教師の例のまさにこの仕事」					
ajáa 犬	Dúpẹ́ ドゥペ	dúdú 黒い	mẹ́ta 3(頭)	tí mo rà 私が買った	yí この	náà 例の
	「私が買った例のドゥペのこの3頭の黒い犬」					
àwọn 複数のもの	ìwé 本	kékèkéké 小さな (集合的)	mẹ̀rẹ̀rẹ̀rin 4 冊 (集合的)	tí mo kó wá 私が買った	yẹn あの	gan-an まさに
	「私の持ってきたまさに 4 冊すべての小さなあれらの本」					

以上の語順はあくまで標準的なものであり，異なる語順も起こりうる。語順が変わる理由としては，次の二つが考えられる。

1. 特定の修飾語を強調する場合

òkúta nílá méjì 「大きな二つの石」

òkúta méjì nílá 「二つの大きな石」(数詞が強調されている)

òkùnrin tí mo kí yèn 「私が挨拶したあの男」

òkùnrin yèn tí mo kí 「あの私が挨拶した男」(指示詞が強調されている)

2. 修飾語を含む名詞句全体が，主要部として機能する場合

	主要部
ojó osè kejì 「二つの日曜日」	(ojó)
ojó kejì osè 「月曜日」	(ojó kejì)
òré alápatà mi 「私の肉屋の友人」	(òré)
òré mi alápatà 「肉屋である私の友人」	(òré mi)
gbogbo àwọn t'ó dúró 「立っている人全員」	(gbogbo)
àwọn t'ó dúró gbogbo 「全員の立っている人」	(àwọn t'ó dúró)

7.4.2 主要部の省略

形容詞，接続詞 ti によって導かれる名詞や代名詞，そして数詞が，主要部として機能している場合がある；

mo lè ra kékeré yèn (kékeré 形容詞 「小さい」) 「私はあの小さいのが買える」

mo gba ti Délé 「私は デレの を手に入れた」

kó méta yí wá 「これら三つを持って来なさい」

これらの文は，もともと主要部の位置を占めていた要素が省略された結果生じたと考えられる。

7.4.3 複合名詞句

複数の名詞，あるいは一つ以上の修飾語を伴った複数の名詞が，接続詞によって結合されたものを複合名詞句と呼ぶ。名詞をつなぐ接続詞には次のようなものがある。

àti: àwo àti síbí 「皿とスプーン」  
 àti ... àti: àtòmódé àtàngbà (= àti ọmọde àti àgbà) 「子供も年  
 寄りも」  
 ti ... ti: tọwọ tẹsẹ (ti ọwọ ti ẹsẹ) 「手も足も」  
 tàbí / àbí: ọdún kan tàbí ọdún méjì 「一年か二年」  
 yálà ... tàbí: yálà ọkùnrin tàbí obìnrin 「男性も女性も」

## 参考文献

- Abraham, R.C. 1958. Dictionary of Modern Yoruba. London. University of London Press.
- Armstrong, R.G. 1962. Yoruba Numerals. London.
- Ashiwaju, M. 1968. Lehrbuch der Yoruba-Sprache. Leipzig.
- Awobuluyi, O. 1978. Essentials of Yoruba Grammar. Ibadan, University Press.
- Bamgboṣe, A. 1964. "Verb-Nominal collocations in Yoruba: a problem of syntactic analysis." Journal of West African Languages, 1, 2, pp.27-32.
- Bamgboṣe, A. 1966. A grammar of Yoruba. Cambridge.
- Bamgboṣe, A. 1974. A Short Yoruba Grammar. Ibadan.
- Bamgboṣe, A. 1990. Fonólójì àti Gírámà Yorùbá. Ibadan.
- Delanọ, I.O. 1958. Atúmọ̀ Èdè Yorùbá. Oxford Univ. Press.
- Delanọ, I.O. 1960. Àgbékà Ọ̀rọ̀ Yorùbá. Oxford Univ. Press.
- De Wolf, P.P. 1971. The Noun Class System of Proto-Benue-Congo. Den Haag.
- Folarin, A.Y. 1987. Lexical phonology of Yoruba nouns and verbs. Ph.D. dissertation, University of Kansas.
- Jungraithmayr, H. and Wilhelm J.G. Moehlig eds. 1983. Lexikon der Afrikanistik. Berlin, Dietrich Reimer Verlag.
- Melzian, H.J. 1934. "Beobachtungen über die Verwendung der Töne in der Yoruba-Sprache." Sonderabdruck, Mitteilungen des Seminars für Orientalische Sprachen zu Berlin.
- Ogunbòwale, P.O. 1970. The essentials of the Yoruba language. London, University of London Press.

- Rowlands, E.C. 1960. Yoruba. London, Teach Yourself Books.
- 清水 紀佳 (Shimizu, Kiyoshi) 1990. 「アフリカの諸言語」, 『言語学大辞典』 Vol.1, pp.237-439.
- Welmers, Wm.E. 1973. African Language Structures. Berkeley.